

発達に特性のある児童 を支援する教育事業

～そにとキャンプ～

出会い

冒険

そして旅立ち



独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立曽爾青少年自然の家

目次

I. そにとキャンプについて.....	2
II. そにとキャンプの取り組み.....	4
III. キャンプを終えて.....	26
IV. 事後アンケートの考察.....	32
V. 研修支援プログラムの作成.....	39
VI. ボランティアから見たそにとキャンプ.....	44
VII. そにとキャンプに協力していただいた方々より.....	46
謝辞.....	50

I. そにとキャンプについて

1. 事業の概要

近年、自閉症スペクトラムや注意欠陥多動性障害などの特性のある児童は増加傾向にあり、文部科学省の調査によると、通級での指導を受けている児童のうち、それらの特性のある児童の人数は平成22年度から令和2年度の10年間でおよそ4倍に増加している。

国立曽爾青少年自然の家(以下、自然の家という)では、発達に特性のある小学3年生～6年生を対象として、社会性や自己肯定感を育むための教育事業「そにとキャンプ」を開催しており、同名を冠した事業は今年度で17年目となる。開始当初は、年間2回行うキャンプ(プレキャンプ、メインキャンプと呼ばれていた)としてスタートしたが、現在は年間3回行うキャンプとなっており、それぞれ「出会いのキャンプ」「冒険のキャンプ」「旅立ちのキャンプ」と呼んでいる。子どもたちは、それぞれのキャンプの活動を通して仲間と協力することや成功体験を経験することで社会性や自己肯定感を育む。

そにとキャンプ独自の特徴として、保護者も事業に参加することが挙げられる。これは、単に子どもたちの活動を見学するというのではなく、保護者たちに向けたプログラムが展開されるということである。近年のそにとキャンプでは、「冒険のキャンプ」の際に保護者も参加している。子どもたちが活動している間、保護者たちは講師から子どもたちへの支援について研修を受けたり、子どもの抱える課題や自身の思いなどを保護者同士で語り合い共感したりする時間を設けている。

このように、そにとキャンプは親子ともに成長することで、キャンプの効果を一過性のものにせず、普段の生活に戻ったあとも持続させることもねらいとした事業である。

2. 事業の趣旨・目的

そにとキャンプの目的は、豊かな自然環境を舞台にした冒険的・課題解決的な活動を通して得られる成功体験や達成感を積み重ねることで社会性や自己肯定感を養うことと、保護者に対して効果的な支援方法についての研修を行うことである。また、事業を通して得た成果の普及・啓発も大きな目的としている。加えて、キャンプ毎に以下のようなねらいを設定しており、それぞれのねらいの達成を目標とするプログラムを展開する。

【出会いのキャンプ】

- ・新しい仲間と出会い、親交を持つ
- ・仲間と協力しようとする気持ちを培う
- ・やり遂げることの喜びを感じる
- ・自然を感じる

【冒険のキャンプ】

- ・冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感を感じる
- ・協力することの大切さを実感し、社会性を養う
- ・成功体験の積み重ねを通して自己肯定感を養う
- ・保護者同士の子育てについての意見交流を図る

【旅立ちのキャンプ】

- ・仲間との再会を喜び、最後のキャンプを共に過ごす
- ・これまでの体験を通して得たもの、成長したことを再確認する
- ・ふりかえりを通して自己肯定感の再構築を行い、これからの生活の新たな目標を持つ

3. そにとキャンプの変遷

平成10年度～平成12年度

事業名:「親子でハッスルそしてリフレッシュ」

対象:不登校の子どもとその保護者

平成13年度～平成17年度

事業名:「みんなでリフレッシュ」

対象:注意欠陥多動性障害のある子どもとその保護者、教員

平成18年度～平成21年度

事業名:「そにとキャンプ～瞳きらきら 心わくわく～」

対象:発達障害のある小学生とその保護者、教員

平成22年度～平成25年度

事業名:「そにとキャンプ」

対象:軽度の発達障害のある小学生とその保護者

平成26年度～令和2年度

事業名:「そにとキャンプ」

対象:軽度の発達障害のある小学3年生～6年生とその保護者

令和3年度～

事業名:「そにとキャンプ」

対象:発達に特性のある小学3年生～6年生とその保護者

Ⅱ. そにとキャンプの取り組み

そにとキャンプでは、事業に参加する子どもたちについて理解することや、事業の目的やキャンプ毎のねらいを達成するための工夫や取り組みをしている。

1. 事業開始前

(1) 事前調査票と経過確認票(事前)の確認

そにとキャンプでは、発達に特性のある児童が参加することから、個々の特性を事前にできるだけ把握できるよう努めている。そのため、参加者を決定した後、参加者とその保護者に向けて事前調査票(資料1)と経過確認票(資料2)を郵送し、参加児童に関して保護者に回答してもらっている。

事前調査票では、診断名のほかに好きなことや嫌いなこと、感覚過敏の有無やこだわりについて把握できるようになっている。また、パニックを起こした場合の対処を事前に聞いておくことで、それに必要な準備することができる。

経過確認票では、「集団参加行動」「言語的コミュニケーション」「非言語的コミュニケーション」「情緒的行動」「自己他者認知」の5つの項目に関して、参加者の特性がどの程度あてはまるか把握できるようになっている。また、「行動面」と「対人関係」に関してそれぞれ長所と短所を記述できるようになっている。

これらの準備をもとに、参加者たちの班分けや部屋割りを決め、実地踏査の際にスタッフで配慮事項を共有する。

(2) 実地踏査

自然の家の教育事業では、事業当日を迎える前にスタッフで集まり、実地踏査(以下、「実踏」という)を行うことが多い。そにとキャンプでは、年3回あるキャンプ毎に実踏をしているが、「出会いのキャンプ」の実踏の際に特別支援教育に関する研修を行うようにしている。ボランティアスタッフ(以下、「ボランティア」という)の中には、そにとキャンプに初めて参加する者もいるため、知識と経験のある講師を招いて特別支援教育そのものや、発達障害の特性について事例やロールプレイを交えながら事前研修を行うことで、キャンプに向けて物品やプログラムだけでなく、心構えも準備できるようにしている。研修に参加したボランティアからは、「研修の時には分からない話も多かったが、実際に子どもたちを目の当たりにして腑に落ちることがたくさんあった」という意見があった。





そにとキャンプ事前調査書

資料1

記入者（ ）

ふりがな			男・女	生年月日	年 月 日生 () 歳
氏 名					
ふりがな			学校名	立 小学校 年 組 (通常学級・特別支援学級)	
保護者名					
住 所	〒 ー		連絡先	電話 : () ー 携帯 : () ー E-mail:	
家族構成 (氏名・続柄)			(出会いのキャンプ) 自然の家への来所・退所方法 ※該当する方に○をつけてください。 来所時 自家用車 自然の家マイクロバス 退所時 自家用車 自然の家マイクロバス		
お子さまについて			行動の様子について		
好きなこと			情報理解	☐ 聞くほうが理解しやすい。 ☐ 目で見たほうが理解しやすい。 ☐ わからない。	
嫌いなこと			特性 気になる点を チェックして下 さい。	騒音・破裂音等の聴覚過敏がある。	
医療機関 教育機関で の診断	☐ ある ・ ☐ ない	年 月 受診		人に触られるのが嫌等の触覚過敏がある。	
	機関名			拘りがある(特に、)	
	診断名			多動・衝動的な行動が目立つ。	
診断後の 支援機関	☐ ある ・ ☐ ない			興味が移りやすい(例えば、)	
	支援機関		アレルギー体質である⇒		
	経過状況	発作を起こす⇒			
薬の処方	☐ ある ・ ☐ ない	配慮して ほしい点	パニックを起こす。 ☐ ある ・ ☐ ない		
	薬品名		どのような時にパニックになりますか？		
	方法 : ☐ 内服薬 ☐ 外用薬 ☐ その他		パニックになった時どのように対応していますか？		
時間 : ☐ 1 日 回 ☐ 屯用 ☐ 食後 ☐ 食間 ☐ 眠前 ☐ その他			バスの座席へのこだわり ⇒ ☐ ある ・ ☐ ない		
その他、薬に関する留意点			どのような席を好みますか？		
			その他		
「そにとキャンプ」について、期待すること等があれば具体的にお書きください。					

※この調査書により、当所が知り得た個人情報に関しましては、厳重に管理いたします。

そにっとキャンプ経過確認票

(保護者の方がご記入下さい。)

資料2

2022年度 国立曽爾青少年自然の家

お子様の学年: お子様の名前:

評価項目		よく できる	たいてい できる	時々 できる	あまり できない	でき ない	備考 (配慮事項など)	
Ⅰ 集団 参加 行動	ルール 理解	① ゲームのルールが守れる。 (するをしない、勝敗を受け入れるなど)	1					
		② 教室の中などのルール(規則など)が守れる。	2					
		③ 友人同士のルール(約束など)が守れる。	3					
	役割 遂行	① 与えられた役割の仕事ができる。	1					
		② リーダーとして指示ができた、声を出したりできる。	2					
		状況 理解	① 集団の動きについていける。	1				
② 活動場面(休憩時間、課題中など)に応じた行動が取れる。	2							
Ⅱ 言語的 コミュニ ケーション	聞き 取り	① 個別に話しかけると話に注意が向けられる。	1					
		② 個別に話しかけると話の内容が理解できる。	2					
		③ 集団場面での一斉指示に注意が向けられる。	3					
		④ 集団場面での一斉指示の内容が理解できる。	4					
	表現	① 伝えたい内容を言葉足らずになることなく話せる。	1					
		② 物事を順序立てて話せる。	2					
		③ 集団に向かって発表や意見が言える。	3					
	答 問 ／ 解	① 自分の知りたいことについて質問ができる。	1					
		② 聞かれた内容にあった回答ができる。	2					
	話し 合い	① 話し合われているテーマに合った発言ができる。	1					
		② 話し合っていて相手と意見交換ができる。	2					
		③ 全体の意見を理解したうえで結論を出せる。	3					
	会 話	① 大人との話のやりとりができる。	1					
		② 友人との話のやりとりができる。	2					
③ 初めての人とも会話ができる。		3						
Ⅲ 非 語 的 コミュニ ケーション	表情・身 振り	① 相手の顔の表情のちがいに気づける。	1					
		② 表情と感情の関係が理解できる。	2					
		③ 身振りやジェスチャーの意味がわかる。	3					
	身体 感覚	① 声の大きさの調整ができる。	1					
② 場の雰囲気(静寂、緊張、のんびりなど)を感じとることができる。		2						

裏面もご記入ください

IV 情緒的行動	自己感情	① 感情をコントロールすることができる。	1		
		② 自分の感情を伝えることができる。	2		
	他者感情	① 相手の気持ちを察することができる。	1		
		② 相手の気持ちに合わせた言い方や行動がとれる。	2		
	共感	① 他者や所属する集団全体の感情（喜び・悲しみなど）を共有できる。	1		
V 自己他者認知	自己認知	① 自分の特徴（長所・短所）を知っている。	1		
		② 自分に対して自信が持てる。	2		
		③ 自分の将来の進路への希望が持てる。	3		
	他者認知	① 友達の特徴（長所・短所）を理解できる。	1		
		② 相手の立場（家族、先生、友人など）に応じてやりとりができる。	2		
	自己他者認知	① 相手と自分の共通点やちがひ（性格・特徴）気づくことができる。	1		

★ 気が付いたことを書いてください

	長所(得意なこと等)	短所(苦手なこと・気になる点等)
行動面		
対人関係		
その他		

* 当所が知り得た個人情報に関しましては、厳重に管理いたします。

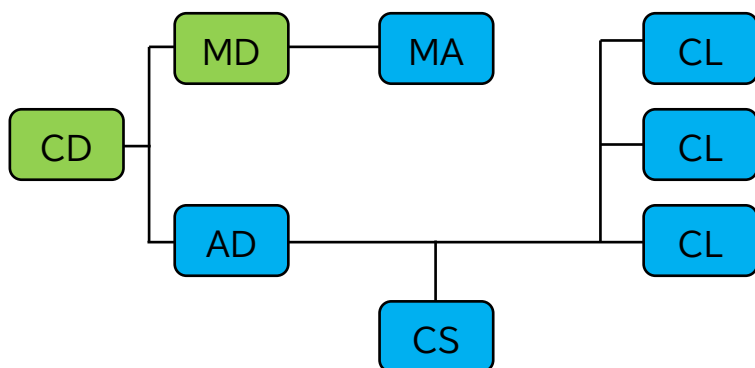
(3)スタッフの体制

そにっとキャンプでは、職員及びリーダーが各々の力を発揮することと、事業を円滑に進行することを目的として役割分担をして事業に臨んでいる。

職員はキャンプ全体の管理をする担当(CD:キャンプディレクター)と物品の準備や移動の総括を行う担当(MD:マネジメントディレクター)に分かれ、キャンプ自体が円滑に進行するよう適宜リーダーに指示や指導を行う。

リーダーたちは、子どもたちへの全体指示や進行を担う担当(AD:アシスタントディレクター)、物品管理やプログラムの用意を行う担当(MA:マネジメントアシスタント)、自分の班の子どもたちに指導する担当(CL:キャンプリーダー)、活動班によらず臨機応変に子どもたちの指導や対応をする担当(CS:キャンプリーダーサポーター)に分かれ、お互いに連携を取りながら子どもたちとともに活動する。

(組織図) 緑色:職員 青色:ボランティア



2. 事業の運営

事業当日、参加者たちを迎え事業目標の達成のためにプログラムを展開していく。本稿では、令和4年度での取り組みについて述べる。

近年のそにっとキャンプでは、特定のキャラクターを主軸にしたストーリーキャンプを展開することが多い。令和4年度は自然の家のマスコットキャラクター「そにっと君」(右図)を登場させた。参加者たちは秘密の組織「チームそにっと」のエージェントとなるべく集められた「エージェントの卵」であり、3回のキャンプで課されるミッションを班の仲間と協力しながら達成することで、正式にチームそにっとのエージェントとして認められる、という設定でプログラムを展開した。

キャンプ中に課されるミッションは、そにっと君から映像や手紙を通して知らされ、その際に画像や絵カードを使用することで活動内容や目標が参加者たちに伝わるよう工夫した。



3. 令和4年度のそにとキャンプ

【出会いのキャンプ】 令和4年6月11日(土)～12日(日) 1泊2日

【冒険のキャンプ】 令和4年9月23日(金)～25日(日) 2泊3日

【旅立ちのキャンプ】 令和4年12月10日(土)～11日(日) 1泊2日

(1)参加者について

A 児:6年生 男児 特別支援学級(自閉症スペクトラム、ADHD、LD)

(出会いのキャンプ)3年生時にそにとキャンプに参加した経験があり、今回で2回目の参加となる。前回の様子を知るボランティアによると、前回と比べて呼びかけへの反応や意思表示ができるようになっており、明らかな成長が見られるとのこと。班の仲間を大切にし、随所で声をかける様子が見られた。誰にでも声掛けができる反面、自分の好きなことや興味のあることについて一方的に話し続けてしまう様子も見られた。

(冒険のキャンプ)他の班の参加者とも積極的に関わろうとする姿が見られ、コミュニケーションをとりながら活動に臨んでいた。

(旅立ちのキャンプ)活動をしながら班の仲間とコミュニケーションをとり、自分の役割を考え集中して取り組む姿が見られた。

B 児:5年生 男児 特別支援学級(広汎性発達障害、ADHD)

(出会いのキャンプ)落ち着いた性格で、指示や説明をしっかりと聞いてから行動を開始することができる。プログラムに臨む際には、自分の持つ知識と照らし合わせて自分なりに考えながら活動していた。率先して行動したりアドバイスをしたりできるため、班の仲間に頼られ、仕事が集中してしまうときがあった。また、列から離れたり、本来の活動と違うことをしたりする仲間に繰り返し注意をする姿が見られた。

(冒険のキャンプ)自分の身の回りのことを自分でやろうとし、できることも増えていた。また、難しい活動中に班の仲間に励ましの声掛けをする姿が見られた。

(旅立ちのキャンプ)列を乱したり、活動と違う行動を取ったりする仲間を以前のように口うるさく注意することも減り、また注意をする際の口調も柔らかくなっていた。

C 児:4年生 男児 通級(自閉症)

(出会いのキャンプ)活発な性格。活動に積極的に参加し、集中して取り組むことができる。また、活動が切り替わってもそれに合わせて行動できる。班の仲間とよく話し、意見を聞くことができる一方で、大人の話や指示はあまり聞こうとしない傾向が見られた。

(冒険のキャンプ)前回と比べて、活動に関する指示や指導を聞いてから行動できるようになった。班の仲間に自分からちょっかいを出しにいくが、ふとした拍子に関わりを絶って自分だけで活動しようとする場面も見られた。

(旅立ちのキャンプ)積極的に活動に参加しながら、班の仲間にも自分から声をかけ、終始一緒に活動しようとコミュニケーションをとっていた。

D児:4年生 男児 通常級(自閉症スペクトラム)

(出会いのキャンプ)活発な性格。班の仲間と自分からコミュニケーションやスキンシップを取ろうとする。積極的に活動に参加することで班のかじ取り役になっていた。自分の気持ちを素直に言葉にすることができるが、考えていることの説明はうまくできない。そのため、C児とのじゃれあいからケンカに発展し、手が出てしまうこともあった。

(冒険のキャンプ)他の班の参加者ともコミュニケーションをとりながら活動する様子が見られた。また、職員やボランティアの手伝いを積極的にしようとする姿が見られた。

(旅立ちのキャンプ)これまでは1班で最も落ち着きがなかった印象であったが、騒ぎすぎず活動に集中して取り組む姿が見られた。そのため、C児とケンカが起こることもなく、小言を言われることがあってもうまく受け流していた。

E児:6年生 男児 特別支援学級(自閉症スペクトラム、ADHD)

(出会いのキャンプ)今回で2回目の参加。前は小学3年生時に参加しており、指示や説明を全くと言えるほど聞けなかったが、今回は落ち着いて話を聞こうとする姿勢や理解しようとする姿が見られるようになった。時折、考え事にふけり周りの話が聞けなくなったり、活動の切り替わりに対応できなかつたりする姿も見られた。

(冒険のキャンプ)活動の切り替えができるようになり、自分なりの折り合いをつけることができるようになった。

(旅立ちのキャンプ)以前よりも集団の活動に自分から参加できるようになり、難しいことや困ったことがあったときには助けを求められるようになった。

F児:5年生 男児 通常級(自閉症スペクトラム)

(出会いのキャンプ)優しい性格で、班の仲間の手助けをよくしていた。また、経験があること、自信があることに関して率先して行動することができ、困っている仲間の補助をしたり、アドバイスをしたりすることができる。反面、優しい性格であるがゆえに、自分のやりたいことがあっても他の者に譲ったり、あきらめたりしてしまう姿が見られた。

(冒険のキャンプ)以前より自分の考えや意見を班の仲間に伝えられるようになり、やりたいことを譲る場面があっても、話し合ったうえで行うようになった。

(旅立ちのキャンプ)求められた時だけでなく自ら周りの状況を見ながら活動し、積極的に困った仲間を手助けしていた。また、以前よりも声掛けやアドバイスが上手くなった。

G児:4年生 男児 通常級(診断なし)

(出会いのキャンプ)活発で、体を動かしたり、走ったりすることが好きである。社交的な性格で、誰とでも積極的にコミュニケーションを取ろうとする。また、リーダーシップを取ることができ、率先して活動に参加し班を引っ張っていた。基本的には友好的だが、時折乱暴な言葉遣いになってしまう場面が見られた。特に、E児とは反りが合わないようで、不満を口にすることもあった。

(冒険のキャンプ)身の回りのことを自分でできるようになり、周囲のことも気にかけながら活動する様子が見られた。

(旅立ちのキャンプ)班の仲間の性格を考えながら行動ができるようになった。E 児とは合わないことも多いが、イライラすることは以前よりも減り、E 児に合わせた行動や声掛けをするよう心掛けている様子が見られた。

H児:4年生 男児 通常級(広汎性発達障害、ADHD)

(出会いのキャンプ)リーダーや班の仲間と協力して活動することができる。特に、G 児と親しくなり、一緒に行動していることが多かった。反面、G 児の E 児に対する小言に同調してしまう場面も見られた。

(冒険のキャンプ)前回にも増して班の仲間と行動を共にし、協力ながら活動しようとする姿が見られた。

(旅立ちのキャンプ)周りに安易に迎合することが少なくなり、自分の意見を仲間に伝えようとする姿が多く見られた。

I児:6年生 女児 通常級(自閉症スペクトラム)

(出会いのキャンプ)参加者唯一の女児で、当初女子一人であることを残念がっていたが、すぐに切り替えて活動していた。自己管理をすることができ、荷物の準備や片付け等は自分一人ですることができる。また、指示や説明をよく聞くことができ、困っている仲間を助けようとする姿が見られた。積極的に活動できるが、疲れがたまると急に反応がなくなり、受け答えができなくなってしまう場面があった。

(冒険のキャンプ)班の仲間やボランティアとよく話し、メンバーのペースに合わせてながら活動したり、アドバイスしたりしていた。

(旅立ちのキャンプ)以前にもまして班の仲間を大切にしようとしている姿が見られ、活動中に様々なことを話しながら楽しそうに取り組んでいた。

J児:5年生 男児 特別支援学級(自閉症スペクトラム)

(出会いのキャンプ)落ち着いた性格で、班の仲間と一緒に活動することを大切にする。指示や説明をよく聞き、見通しを持つことができたなら積極的に行動することができる。進んで人の手伝いをしたり、手助けをしたりする優しい姿がよく見られた。反面、優しい性格がゆえに、不満があっても我慢してしまうようで、L 児の奔放な行動に振り回されつつも、おさえて活動している様子が見られた。

(冒険のキャンプ)プログラムごとに自分なりの目標を立てながら活動していた。また、周りの様子を見ながら自分の取るべき行動を考えることができるようになっていた。

(旅立ちのキャンプ)L 児に対して我慢しながら活動することは少なくなり、うまく声をかけながら班のメンバーとして一緒に活動しようとする姿が見られた。

K 児:4年生 男児 通常級(精神発達遅滞)

(出会いのキャンプ)にこやかで、親しみやすい性格である。リーダーや班の仲間と話すときには相槌をしっかりと打つなど、傾聴する姿勢が見られる。反面、自分が話す際には言葉が上手く出てこないことが多く、文字を書くことも苦手である。それゆえ、言いたいことがあってもうまく言えずに我慢してしまう姿も見られた。活動一つ一つに熱心に取り組み、体を動かすプログラムだけでなく、ふりかえりなどでも一生懸命考えて自分の考えを表現しようとしていた。

(冒険のキャンプ)一人で集中して活動することも多かったが、冒険のキャンプでは自分から班の仲間と関わろうとする姿が見られた。

(旅立ちのキャンプ)班のムードメーカーになり、みんなからかわいがられている様子が見られた。I 児とよく話しており、集合場所にも2人だけで電車に乗ってきた。

L 児:4年生 男児 特別支援学級(自閉症スペクトラム)

(出会いのキャンプ)友好的な性格で、1人だけ少し遅れての参加だったが、すぐに班の仲間と打ち解けていた。自分の意志ややりたいことを言葉で表現でき、先々のことを進んでしようとする。活動をしている際には集中しすぎてしまい、周りの状況が目に入らなくなるため自分のペースで物事を進めてしまい、悪気なく他の人の邪魔をしてしまうときがある。(行く手を遮る、道具を自分の方に引き寄せてしまう 等)

(冒険のキャンプ)体調不良のため欠席した。

(旅立ちのキャンプ)出会いのキャンプ時に比べると、班の仲間のことを気かけながら活動することが多くなり、互いにコミュニケーションをとりながら活動していた。

4. 出会いのキャンプについて

(キャンプのねらい)

- ・新しい仲間と出会い、親交を持つ
- ・仲間と協力しようとする気持ちを培う
- ・やり遂げることの喜びを感じる
- ・自然を感じる

出会いのキャンプのプログラム	
6月11日(土)	6月12日(日)
はじまりの会	朝のつどい
昼食	朝食
そにっとウォークラリー	片付け・清掃
夕食	野外炊事
ベッドメイク	昼食
ゆうやけハイク	キャンプのふりかえり
入浴	おわりの会
1日のふりかえり、就寝	

(1) 出会いのキャンプのプログラムについて

参加者にとって、そにっとキャンプの仲間にも初めて会う機会となるため、出会いのキャンプでは特に「班の仲間との親睦を深めること」に重きを置き、参加者どうしで協力する活動を多く取り入れた。

① そにっとウォークラリー

自然の家の敷地内各地を巡りながら、それぞれの場所で設定されたミッションに挑戦する。今回は雨天だったため、館内でのウォークラリーを行った。

ア. フラフープであそぼう

ねらい: 班の仲間との交流 創意工夫して遊びを考える

フラフープを使った様々な競技(フラフープくぐり、ボール運び等)を行ったり、フラフープ遊びをしたりしながら、交流する。

参加者たちはあらかじめ用意した遊びだけでなく、それぞれの遊び方を紹介し合いながら交流していた。



イ.ふうせんであそぼう

ねらい:班の仲間との交流 ルールを守って遊ぶ

部屋の中央にネットが張っており、風船をうちわで打ったりあおいだりしながらラリーをする。ネットはブルーシートで作っており、風船が飛んでくるポイントが分かりにくくなっている。

うちわで風船を操るのは意外と難しく、参加者たちはうちわをラケットのように使う、手でラリーするなどの工夫を出し合っていた。



ウ.バケツツボール

ねらい:意見を出し合いながら共通の目的を果たす

ブルーシートの上にバケツとボールを乗せ、シートの四隅を一人一か所持ち、指示を出し合いながらボールをバケツの中に入れ、立てたままブルーシートを床に置く。クリアできたら、ボールとバケツを増やして再度チャレンジする。

初めは黙々と手を動かしていた参加者たちも、次第に声を掛け合うようになり、どの班もクリアすることができた。



エ.まきわりにチャレンジ！

ねらい:班の仲間との協力 野外炊事で使う道具の使い方を知る

二人一組でキンドリングクラッカーを使って薪を割る。キンドリングクラッカーは翌日の野外炊事で使用し、ウォークラリーで割った薪は野外炊事で火おこしをする際に焚きつけに利用する。

参加者たちは、初めのうちはペアで丁寧に取り組むが、次第に薪が割れる時の音や独特の間隔が楽しくなり、交代しながら次々と薪を割っていた。



オ.ふとんをしこう

ねらい:自然の家での生活に慣れる 自分のことを自分でできるようになる

自然の家で宿泊する際に行うベッドメイクを体験する。実際に敷いてある見本の布団を参考にしながら、班で協力して布団を敷く。体験したことを参考にして、夜に自分の布団を自分で敷く。

この時にグループで助け合いながらベッドメイクをする体験をすることで、その後ひとりで行う際には非常にスムーズであった。



カ.カプラをつみあげよう

ねらい:班の仲間との協力

カプラをできるだけ高く積み上げる。踏み台を使ったり、カプラを渡してもらったりしながら、どれだけ高くできるかを班の仲間と考えながら取り組む。

参加者たちはそれぞれでカプラを積み上げ、高さや速さを競って交流していた。



※屋内でのプログラムで移動距離も短く、予定よりも早く終了したため、「緊急ミッション」と称してプログラムを増やした。

キ.ロープで星をつくろう

ねらい:班の仲間との協力 意見を出し合う

ロープで輪を作り、全員で持つ。ロープを持ったまま星型五角形(☆)を作るにはどうしたらいいか話し合い、場所を入れ替えたり動いたりして完成させる。

初めは思い思いに動くが、なかなか星の形にならない。参加者たちは何度も挑戦しながら、正解の動きを導き出していた。



ク.ムカデ歩行

ねらい:班の仲間との協力 息を合わせて行動する

ムカデ板(4人同時にはけるスリッパ)を装着し、息を合わせて移動する。先に出す足を決めたり、ペースを相談したりしながら前に進んでいく。

初めはぎこちない動きだったが、自然と「せーの!」「右、左、右、左…」の声が上がリ、どの班も最後には研修室を自由自在に移動していた。



リ.フリスビー投げチャレンジ

ねらい:班の仲間との協力 自分の役割を果たす

フリスビーをゴールに向かって投げ入れる。フリスビーを投げる係と、ゴールに入らなそうなフリスビーをキャッチしてゴールに入れる係に分かれ、制限時間以内にどれだけゴールに入れられるかを競う。

参加者たちは役割を交代しながら、記録を上げるための方法を模索していた。



②ゆうやけハイク

ねらい:自然に親しむ

当初ナイトハイクの予定だったが、暗くなっていなかったため「ゆうやけハイク」に名前を変更した。日が沈みながらだんだん暗くなっていく自然の姿を感じる。当日は雨が降っており、雨具を着て出かけた。雨天時にわざわざ外出する経験を持つ参加者は少なく、雨が雨具にあたる感触を楽しみながら夕暮れの散歩を楽しむことができた。



③野外炊事

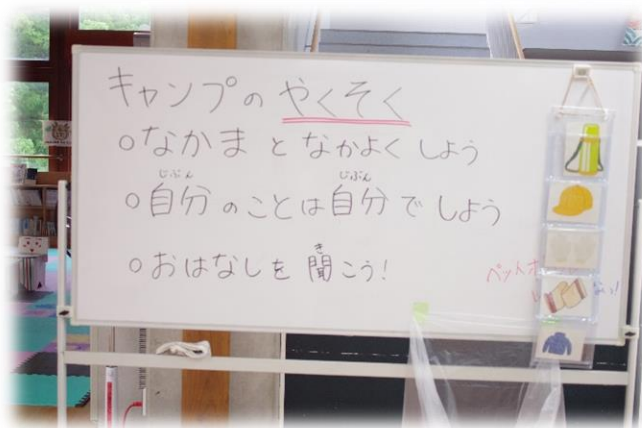
ねらい: 班の仲間と協力する 自分の役割を果たす

2日目は本館炊事場で「ちゃんこ鍋」を作った。参加者たちは「調理係」と「火おこし係」に2名ずつ分かれ、それぞれ説明を聞いて作業を進める。火おこし係は前日に体験した薪割りを思い出しながら薪を準備し、リーダーのサポートを受けながら火おこしをする。調理係は材料の皮をむいたり、切ったりして準備を進め、鍋を火にかける。鍋を火にかけた後は、火おこし係は火の調節、調理係は鍋の様子見をしながら協力してちゃんこ鍋を作り上げる。

最後は、班で分担しながら洗い物やカマドの掃除を行う。



(出会いのキャンプの一場面)



5. 冒険のキャンプについて

(キャンプのねらい)

- ・冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感を感じる
- ・協力することの大切さを実感し、社会性を養う
- ・成功体験の積み重ねを通して自己肯定感を養う
- ・保護者同士の子育てについての意見交流を図る

冒険のキャンプのプログラム		
9月23日(金・祝)	9月24日(土)	9月25日(日)
はじまりの会	朝のつどい	朝のつどい
昼食	朝食	朝食
体育館遊び	竹の食器づくり	片付け、テント清掃
入浴、夕食	昼食	ソロ炊事にチャレンジ
火おこしチャレンジ	山の冒険	昼食
1日のふりかえり	入浴、夕食	キャンプのふりかえり
	火おこしチャレンジ	おわりの会
	キャンプファイアー	
	1日のふりかえり	

※「水の冒険」として川を遡りながら歩く活動を予定していたが、雨天により中止

(1) 冒険のキャンプのプログラムについて

冒険のキャンプでは、名前の通り全3回のキャンプのうちで最も冒険的な活動をする。それらを通して、参加者一人一人が自己肯定感や自己有用感を得るために「一人一人が達成感を感じる」とことと「最後までやり遂げる」ことに重きを置いたプログラム構成とした。当初、1日目に「山の冒険」を行い、2日目に「水の冒険」を行う予定であったが、熱帯低気圧の影響で初日が大雨となり、「山の冒険」は2日目に延期、「水の冒険」は中止し代替プログラムを行うことにした。

また、冒険のキャンプでは他の回と違い、自然の家のキャンプ場でテント泊をする。宿泊棟とは違う不便な環境の中で身の回りの支度をしたり、天気の急な変化や夜中テントのそばを歩く動物の気配を感じながら夜を過ごしたりすることで、非日常を乗り越え、達成感を得ることをねらいとしている。

更に、子どもたちのプログラムと同時進行で保護者も独自の活動をする。講師を招き、特別支援教育や子育てに関する講義やワークショップをしていく中で、特別支援教育や「障がい」への理解を深めてもらうと同時に、子育てに関する思いや悩みを共有する機会を十分に設け、子どもだけでなくその保護者にも今後の展望がもてるようなきっかけづくりとしている。

①体育館あそび

ねらい:班の仲間と協力する 達成感を得る

当日は雨天だったため、スケジュールを変更して体育館でできる活動をした。それぞれの遊びには班ごとに目標や一人一人の目標を設定させ、それを達成するために協力したり、方法を話し合ったりする。

ア.大縄跳び

班の仲間と回し方や跳ぶ回数などを考え、目標達成できるようにチャレンジする。

参加者たちは回す速さや並び方について相談を重ね、跳べる回数を増やしていった。



イ.スラックライン

体育館中央に張ったベルトの上を歩いて渡る。端まで歩くのにできるだけ補助を少なくしたり、できるだけ長い時間静止して立っていたりすることに挑戦する。

初めのうちは揺れるベルトの上を恐々歩くが、一度ゴールできると自信になり、何度もチャレンジしていた。



ウ.ストラックアウト

1～9まで番号が振られた的を、ボールを投げて倒す。球数を制限したり、時間制限を設けたりと、様々な条件を設定しながら挑戦する。

参加者たちは、初めはただボールを投げて遊ぶが、次第に自ら投げられるボールの数や、活動時間に制限を設け、協力しながらクリアしていた。



エ.クライムウォーク

体育館横の壁に取り付けられた突起に足をかけたり、掴んだりしながら横向きに進む。ゴールを決めたり、ルートを考えたりしながら、自分が決めた目標を達成できるよう進んでいく。

参加者たちは何度か練習を重ねることでコツをつかみ、それぞれが決めたゴール地点に向かって着実に歩を進めていた。



②火おこしチャレンジ

ねらい:挑戦し続ける 成功体験を得る

ファイアースターターを使って、麻紐に火をつけることに挑戦する。最終日に行うソロ炊事で火おこしをするための練習として、1日目、2日目の夜に挑戦する時間をとった。参加者たちは火がつくまで何度も挑戦し、1日目に火がつかなかった参加者も、くじけずに2日目の活動に臨んでいた。



③竹の食器づくり

ねらい:達成感を得る 身近な素材に親しみを持つ

竹をヤスリで削りながら、コップ、皿、箸を作る。作った食器は、最終日のソロ炊事でカレーを食べるのに使う。安全に配慮し、ナイフは使わずヤスリのみで行い、完成した食器は煮沸消毒する。参加者たちはこちらの想定以上に集中して作業に取り組み、全員が自分の食器を完成させることができた。



④山の冒険「自然の家に帰還せよ」

ねらい:困難を乗り越える 達成感を得る

自然の家からマイクロバスに乗って三重県津市三杉町太郎生出張所まで行き、そこから徒歩で自然の家に帰る。美杉の集落と亀山峠を通る約5kmの道のりである。参加者たちは、スタート地点が三重県であることに驚き、ゴールまでかかる距離や時間を気にしていたが、全員で最後まで歩ききることができた。



⑤キャンプファイアー

ねらい:仲間との交流 自身を見つめなおす

参加者とその保護者で火を囲み、ゲームをしたり、歌ったりして過ごす。ボランティアスタッフの主導で進行し、参加者たちは保護者とともに積極的にゲームに参加していた。また、保護者も子どもたちと一緒に良い時間を過ごすことができていたようであった。



⑥ソロ炊事

ねらい:達成感を得る

火おこしチャレンジで練習したファイアースターターを用いて火をおこし、お湯を沸かしてレトルトカレーを作る。ご飯は空き缶を使って炊き、食器は前日に自身で製作したものをを用いる。参加者たちは薪割りから積極的に行動し、練習の成果を発揮しようと意気込んでいた。反面、火を起こすことが大きな目標になってしまい、火をつけられたことに喜び、その後の調理に集中できない参加者もいた。



(2)保護者プログラムについて

子どもたちと同様の日程(2泊3日)で保護者プログラムを実施した。保護者プログラムは、保護者から離れて子どもたちだけで活動することの意義(=親離れや自立、他者との関わり)を重視して、2日目のキャンプファイアーを除き、意図的に子どもたちと活動を共にする機会を設けていない。

冒険のキャンプ(保護者プログラム)		
9月23日(金・祝)	9月24日(土)	9月25日(日)
オリエンテーション	ワークショップ	ワークショップ
ワークショップ	亀山登山	ソロ炊事にチャレンジ
火おこし・焚き火会	キャンプファイアー (子どもと共に)	ふりかえり
	交流会・親睦会	

①ワークショップ

3日間で2名の講師に来て頂いた。NPO法人地球元気村自然学校校長の奥田博先生からは、「そにとキャンプ」そのものの意義について講義があり、併せて、これまで長くそにとキャンプに関わってきたボランティアからも、自身が見てきた子どもたちの成長や経験について、保護者に向けて話してもらった。

大和高田市教育委員会特別支援教育指導員の吉田昌功先生からは、発達障害についての講義、そして「対話」を通して我が子だけでなく「親」としての自己を見つめ、ふりかえることができるような時間をコーディネートして頂いた。専門的な知見から話をして頂いたことで、保護者それぞれに気づきがあった様子であった。一方的な講義だけでなく、参加者がそれぞれの思いを語ったり、互いに悩みを共有したり、また意見やアドバイスを交換したりする場面も設定することで活発な意見交換が見られた。



②火おこし・焚き火会・交流会・懇親会

保護者同士が親睦を深め、日頃とは違った環境で新たな出会いを保護者自身が楽しむことも重要と考えている。それぞれが日頃抱えている悩みや思いを話し、共感的に聴き合い、安心できる関係を作っていくことも保護者プログラムの目的の一つである。

③亀山登山

子どもたちは、遠方から県境を越えて亀山の峠を越えて施設に戻るコースをたどる。一方で、保護者は施設からスタートして峠に向かう逆のコースを辿る。意図せず、保護者集団と子どもたちそれぞれのグループが峠で出会うことになった。子どもたちどうしが力を合わせて県境を越え、喜びを分かち合う姿を見て、保護者も山登りの大変さや達成感に共感し、その成長に喜びを感じている様子だった。

④ソロ炊事にチャレンジ

亀山登山同様、子どもたちがチャレンジしていることを、保護者も追体験する機会としてソロ炊事を行った。ファイアースターターの難しさや火がついた時の喜びを子どもたちと同様に感じ、その後火を育て空き缶でご飯を炊いた。保護者たちも時には助け合いながら、真剣にソロ炊事に向き合っていた。体験を通して、また保護者同士の関わりを通して、保護者自身が変わっていく様子を目の当たりにすることができた。



⑤その後

保護者が自主的に、キャンプ後も連絡を取り合い、ミーティングを開いたとの知らせを受けている。いずれは自然の家を再び訪れ、子どもたちと共にキャンプをする計画もあると聞いている。このように、「そにっとキャンプ」は子どもたちだけでなく、保護者の繋がりも創り出す機会になっている。

3. 旅立ちのキャンプについて

(キャンプのねらい)

- ・仲間との再会を喜び、最後のキャンプを共に過ごす
- ・これまでの体験を通して得たもの、成長したことを再確認する
- ・ふりかえりを通して自己肯定感の再構築を行い、これからの生活の新たな目標を持つ

旅立ちのキャンプのプログラム	
12月11日(土)	12月12日(日)
はじまりの会	朝のつどい
昼食	朝食
そにっとウォークラリー	片付け、清掃
ベッドメイク	冬の亀山登山にチャレンジ
夕食、入浴	キャンプのふりかえり
巨大ドミノを完成させろ	昼食
1日のふりかえり、就寝	がんばったこと発表会
	終わりの会

(1)旅立ちのキャンプのプログラムについて

旅立ちのキャンプは、全3回のキャンプのうちで最後のキャンプとなる。参加者たちにそにっとキャンプでの出会いを大切にしてもらうために、「参加者どうしのつながりの強化」に重きを置いたプログラム構成とした。そのために、一つ一つのプログラムを参加者どうしのコミュニケーションが生まれるような活動を取り入れた。

①そにっとウォークラリー

ねらい:参加者どうしで協力する 自己肯定感の強化

自然の家の施設及びその周辺に配置された7つのミッションをすべてクリアすることを目指す。各地では「出会い」「冒険」のキャンプで行ってきた活動に関するクイズが出題され、それに答えてから新たなミッションに挑戦する仕組みになっている。



ア.長さ・重さ探し

野外炊事場にある木の枝や石の中から長さ15cmのものと重さが500gのものをそれぞれ探す。参加者たちは定規やはかりを使って得た値と手の間隔を頼りにしながら、少しずつ目標の数値に近い長さや重さを持つものを探し、計測した数値に一喜一憂していた。



イ.いくつ見つかる？

森の子広場で見つけれられるものの頭文字で、あいうえお表が何文字埋められるか挑戦する。参加者たちは様々な物から着想を得て、想定していたより多くの文字(各班およそ30文字)を見つけることができていた。

ウ.フリスビーパス

はつらつ広場に設置されたフラフープの中に立ち、そこから出ないようにしながらフリスビーをパスしてつなぎ、ディスクゴルフのゴールに入れる。参加者たちはなかなかつながらないパスに苦慮しながらも、意見を出し合い投げ方や順番を考え、目標を達成することができた。



エ.お亀池、何歩で歩ける？

曾爾高原にある「お亀池」を半周するのに何歩歩く必要があるかを予想し、測定する。参加者たちはそれぞれ予想を立て、班の仲間と数を数えながら歩いていた。

オ.とっておきの一枚

曾爾高原にある小高い丘の上で班ごとに記念撮影をする。参加者たちはポーズや配置を相談し、班の記念写真を撮影した。撮影した写真は、メッセージカードに利用した。

カ.広場で遊ぼう

つどいの広場を利用してできる遊びを班ごとに考え、実行する。参加者たちは自分のやりたい遊びを出し合い、進め方や順番を相談しながら遊びを決め、つどいの広場を走り回っていた。

キ.わたれ！のぼれ！

冒険のキャンプでは体育館で行ったスラックラインを屋外で行う。他にも、ネットを渡る遊びもすることができる。参加者たちは久しぶりのスラックラインの挑戦に張り切り、またネット遊びも楽しんでいた。



③巨大ドミノを完成させろ！

ねらい:班の仲間と協力する

班ごとにドミノを並べ、それをすべてつなげるプログラムである。各班それぞれクリスマスモチーフにした課題ドミノを並べた後、それぞれのオリジナルのドミノも用意する。決められた時間までの間に、途中で倒れてしまうアクシデントが何度も起こったが、そのたびに参加者たちはお互いに声を掛け合いながらチャレンジしていた。



④冬の亀山登山にチャレンジ！

ねらい:達成感を得る

自然の家を出発し、亀山峠からまず倶留尊山方面に登り、展望広間まで行ってから折り返し、亀山山頂を目指す。当日は風が強く、なかなか体が温まらなかったが、1人の離脱者も出ることなく全員が登りきることができた。



⑤がんばったこと発表会

ねらい:自己肯定感を得る

キャンプ全体のふりかえりを通して、これまでの活動で最も思い出に残ったこととその理由、さらに今後自分が頑張っていきたいことを「ふりかえりシート」に記入する。その後の「がんばったこと発表会」では参加者一人一人が順番に自分のふりかえりシートを読み上げ、自分の頑張りを再認識し、これからの生活に向けた決意を語った。人前での発表に対して抵抗感をもつ参加者がいることも予想されたが、全員が前に出て発表することができた。



Ⅲ. キャンプを終えて

1. 参加者のアンケートより

自然の家では、教育事業の最後に参加者アンケートを行っている。参加者からの評価や、その後の改善に役立てることを目的としており、項目は事業ごとに異なる。また、自由記述の欄もあり、参加者からの率直な感想を目にすることができる。

(1) 出合いのキャンプのアンケートより

問3. 「そにっとキャンプ」に参加した感想や、がんばったことを書いてください。

〔参加できてよかった。火をがんばってつけた。なつづきをいっしょにやりました。〕

◇◇◇ ありがとうございます ◇◇◇

問3. 「そにっとキャンプ」に参加した感想や、がんばったことを書いてください。

〔がんばったことはいくあしです。〕

◇◇◇ ありがとうございます ◇◇◇

(2) 冒険のキャンプのアンケートより

(参加者)

問3. 「そにっとキャンプ」に参加した感想や、がんばったことを書いてください。

〔山登りがとてもつきたけど最後まであきらめてよかったです。『最後までがんばる!』のことを目標に楽しくしたいです。〕

◇◇◇ ありがとうございます ◇◇◇

問3. 「そにっとキャンプ」に参加した感想や、がんばったことを書いてください。

〔とても楽しかった。火のぼり、火あきし。〕

◇◇◇ ありがとうございます ◇◇◇

(保護者)

問4. この事業に参加して、ご意見やお気付きの点がありましたらお書きください。

親は見るとかと思って参加しましたが、親のプログラムの内容が深く
自己啓発になった。今後参加したいので、参加者の拡大を希望しています。
◇◇◇ ご協力ありがとうございました ◇◇◇

問4. この事業に参加して、ご意見やお気付きの点がありましたらお書きください。

保護者同士 色々と話す事が出来て楽しく過ごせました。
子供の成長について、自分の考え、行動を改めて見つめる事が
◇◇◇ ご協力ありがとうございました ◇◇◇ 出来ました。

問4. この事業に参加して、ご意見やお気付きの点がありましたらお書きください。

ボランティアの方々の接し方に大変感動しました。又講師の方々のお言葉も
わかりやすくこのような内容のお話を聞く機会もないので良かったと思い
ます。
◇◇◇ ご協力ありがとうございました ◇◇◇

(3)旅立ちのキャンプのアンケートより

問3. 「そにとキャンプ(出会い・冒険・旅立ち)」全体を通しての感想を書いてください。

おうほして良かったと思います。理由は、いろんなことを体験でき
ほとんどが大人でくさったりするような物は金銭を払ってなかったけど
いろいろやる事があって思ったことは何事もなく楽しかったというのを大満足
◇◇◇ ありがとうございます ◇◇◇
いそいで参加して良かったと思います!!

① そにとキャンプ(旅立ちのキャンプ)はどうでしたか。

〔④ 3 2 1〕

山遊びが達成感があり良かったです

(4)参加者アンケートについて

回を重ねるごとに参加者たちの記述の量が増え、自身が頑張ったことについて書く内容が具体的になっていく傾向が見られた。そにとキャンプのねらいそのものに関わる単語(達成感、挑戦、最後までやり抜く 等)も見られ、プログラムやキャンプでの働きかけの有用性が伺える。

2. 事後アンケートより

そにっとキャンプでは前述の経過確認票(事前)と同様の様式のものに加え、保護者自身の変化について問う「事後アンケート」を実施している。

経過確認票(事前)は原本を自然の家が回収しているため、保護者は改めてそにっとキャンプが終了した後の参加者の姿をもとに回答することとなる。学校生活や家庭など様々な要素が影響し合って参加者たちの成長につながっていることから、全ての変化をそにっとキャンプの効果によるものだと判断することは難しいが、事前から事後にかけての変化を読み取ることで、様々な考察(次章)をすることができる。

保護者自身に問うアンケートでは、保護者プログラムなどをきっかけに、自分自身に変化があったことについて問う。また、保護者プログラムに参加して感じたことや、キャンプから帰ってきた参加者の様子を見て感じたことを記述する欄もある。

(1)事後アンケートの一例

①保護者について

記入者名 ()			
「そにっとキャンプ」に参加された、保護者ご本人についてお聞かせください。(裏面もあります)			
評価項目	できるようになった	変わらない	できなくなった
①お子さんの成長をあせらずに見守る		☐	
②お子さんをほめる	☐		
③お子さんのリラックスできる場をつくる		☐	
④お子さんの行動を待つ		☐	
⑤お子さんに注意をするとき、落ち着いた話し方をする		☐	
⑥お子さんの不適応行動に対して、話し合う機会をもつ	☐		
⑦一人で悩まずに、心配事は家族や友人に相談する	☐		
⑧必要なときに学校や相談機関を利用する	☐		
⑨お子さんの行動、考えが理解できる		☐	
⑩お子さんと一緒にいて楽しめる	☐		

その他、ご自身の変化があればお書きください。 (理由があれば書き添えてください)	・ママ友等とどこかへ出かけたりすることもなく、その場での付き合いしかしていなかったが、そにっとキャンプで知り合った人たちと出かけることになり、自分での初めてのことで嬉しく思っている。
お子様や学校との関わりに変化があればお書きください。	・子どもの話をしっかり聞かなくては、と思うようになった。 ・ゲームの時間を少しずつ少なくしていこうとしているが、なかなか難しい。
ご自身が「そにっとキャンプ」に参加された感想や、お子様が「そにっとキャンプ」について家庭で言っていたことがあればお書きください。	・保護者同士の話し合いの時に、講師も自身の子どもの話をしてくれてありがたかった。順調に見えている家庭でもそれぞれに子育てに関する悩みがあったりして、自分だけではないんだと知り、あきらめずに頑張ろうと思った。 ・ファイヤースターターで火をつけたことをほめてもらい、とても自信になったようで、「キャンプに行きたい」とよく言うようになった。

保護者の事後アンケートからは、そにっとキャンプの保護者プログラムをきっかけに、子どもへの接し方だけでなく自身の生活にも変化があったという記述が多く見られた。特に、子育てや将来に関して不安を感じていた保護者には、自身の悩みや思いを他の保護者と共有する場があったことで、安心感を得ることにつながったことが伺える。



②参加児童について

○ そにとキャンプ経過確認票

○ 事前→事後
○ ※○は変化なし

令和4年度 国立曽爾青少年自然の家

お子様について保護者の方が書き下さい。(裏面もあります)

お子様の学年: 4 お子様の名前:

評価項目		よくできる	たいていできる	時々できる	あまりできない	できない	備考 (配慮事項など)	
I 集団参加行動	ルール理解	① ゲームのルールが守れる。 (するをしない、勝敗を受け入れるなど)	1		○			
		② 教室の中などのルール(規則など)が守れる。	2		○			
		③ 友人同士のルール(約束など)が守れる。	3		○			
	役割遂行	① 与えられた役割の仕事ができる。	1		○			
		② リーダーとして指示ができた、声を出したりできる。	2			○		
	状況理解	① 集団の動きについていける。	1		○			
② 活動場面(休憩時間、課題中など)に応じた行動が取れる。	2	○	○					
II 言語的コミュニケーション	聞き取り	① 個別に話しかけると話に注意が向けられる。	1		○			
		② 個別に話しかけると話の内容が理解できる。	2		○			
		③ 集団場面での一斉指示に注意が向けられる。	3		○	○		
		④ 集団場面での一斉指示の内容が理解できる。	4		○	○		
	表現	① 伝えたい内容を言葉足らずになることなく話せる。	1			○	○	
		② 物事を順序立てて話せる。	2		○	○		
		③ 集団に向かって発表や意見が言える。	3		○	○		
	質問・回答	① 自分の知りたいことについて質問ができる。	1		○			
		② 聞かれた内容に合った回答ができる。	2		○			
	話し合い	① 話し合われているテーマに合った発言ができる。	1		○			
		② 話し合う中で相手と意見交換ができる。	2		○			
		③ 全体の意見を理解したうえで結論を出せる。	3		○	○		
	会話	① 大人との話のやりとりができる。	1	○	○			
		② 友人との話のやりとりができる。	2		○			
③ 初めての人とも会話ができる。		3		○	○			
III 非言語的コミュニケーション	表情・身振り	① 相手の顔の表情のちがいに気づける。	1		○			
		② 表情と感情の関係が理解できる。	2		○	○		
		③ 身振りやジェスチャーの意味がわかる。	3		○	○		
	身体感覚	① 声の大きさの調整ができる。	1		○	○		
		② 場の雰囲気(静寂、緊張、のんびりなど)を感じることができる。	2		○	○		

IV 情緒的行動	自己感情	① 感情をコントロールすることができる。 ② 自分の感情を伝えることができる。	1   2  	
	他者感情	① 相手の気持ちを察することができる。 ② 相手の気持ちに合わせた言い方や行動がとれる。	1   2  	
	共感	① 他者や所属する集団全体の感情（喜び・悲しみなど）を共有できる。	1 	
V 自己他者認知	自己認知	① 自分の特徴（長所・短所）を知っている。 ② 自分に対して自信が持てる。 ③ 自分の将来の進路への希望が持てる。	1   2  3 	
	他者認知	① 友達の特徴（長所・短所）を理解できる。 ② 相手の立場（家族、先生、友人など）に応じてやりとりができる。	1   2  	
	自己他者認知	① 相手と自分の共通点やちがいがい（性格・特徴）に気づくことができる。	1 	

★ キャンプ終了後に変化があったことについて書いてください

行動面	長所(得意なこと、好きなこと 等)	短所(苦手なこと、嫌いなこと、気になる点 等)
	・学校に遅れずに通えている ・規則正しい生活ができるようになった	・イライラすることが減り、突然キレることが少なくなった。 ・宿題や翌日の準備など、苦手なことでも取り組むことが増えた
対人関係	・友達にいじわるをすることが減った ・いろんな友達と遊べるようになり、不満を言うことがほとんどなくなった。	
その他		

* 当所が知り得た個人情報に関しましては、厳重に管理いたします。

参加者アンケートについては、次章にて考察を述べる。

IV. 事後アンケートの考察

事後アンケートを事前調査と比較すると、参加者の社会性や自己肯定感について様々な変化を読み取ることができた。本稿では、特に参加者に関する事後アンケートについての考察を述べる。

1. 事後アンケートまとめ(保護者)

「そにっとキャンプ」に参加された、保護者ご本人についてお聞かせください。(裏面もあります)

評価項目			
①お子さんの成長をあせらずに見守る	できるようになった 6名	変わらない 4名	できなくなった
②お子さんをほめる	できるようになった 7名	変わらない 3名	できなくなった
③お子さんのリラックスできる場をつくる	できるようになった 5名	変わらない 5名	できなくなった
④お子さんの行動を待つ	できるようになった 6名	変わらない 4名	できなくなった
⑤お子さんに注意をするとき、落ち着いた話し方をする	できるようになった 5名	変わらない 5名	できなくなった
⑥お子さんの不適応行動に対して、話し合う機会をもつ	できるようになった 7名	変わらない 3名	できなくなった
⑦一人で悩まずに、心配事は家族や友人に相談する	無回答1名 7名	変わらない 2名	できなくなった
⑧必要なときに学校や相談機関を利用する	できるようになった 7名	変わらない 3名	できなくなった
⑨お子さんの行動、考えが理解できる	できるようになった 6名	変わらない 4名	できなくなった
⑩お子さんと一緒にいて楽しめる	できるようになった 7名	変わらない 3名	できなくなった

その他、ご自身の変化があればお書きください。	・これまで父親が発達障害についての知識がなく、怒ってばかりいたが、ワークショップでの話を聞いて、子どもの行動を理解できるようになった。 ・自分自身にも同じような特性があるという気づきがあった。 ・家族間でいろいろなことを協力するようになった。 ・子どもがやってみたいと言うことはやらせていこうと思うようになった。 ・キャンプを通して子どもが成長している姿を見られたので、見守ったり、本人に任せたりすることができるようになり、自分のストレスが減った。 ・以前よりも、自分の子どもを「良い子」「かわいい」と思えるようになった。 ・これまでママ友等と一緒に出席したりすることもなく、その場の付き合いしかなかったが、そにっとキャンプで知り合った人たちと出かけることになり、自分でも初めてのことで嬉しく思っている。 ・よく似た悩みを持つ保護者たちと話をすることができ、様々な考え方があるのだと視野が広がった。
お子様や学校との関わりに変化があればお書きください。	・これまで子どものことを否定ばかりしていたが、最近は子どものことを褒められるようになってきた。 ・学校を休みたいと言うことがなくなり、遅刻することもほとんどなくなった。 ・子どもの話をしっかり聞かなくては、と思うようになった。
ご自身がそにっとキャンプに参加された感想や、お子様がそにっとキャンプについて家庭で言っていたことがあればお書きください。	・初めての体験や、友達作りなど、今まで体験したことがないことがたくさんできて、ありがたい。 ・特性を持つ子どもの親として、キャンプを通して出会えた方たちと、悩みは違えど同じ境遇で、とても話しやすかった。連絡先を交換できたので、これからもつながっていけるといいと思っている。 ・普段体験できないことをさせてもらって、すごく成長したと思う。 ・子どもは「楽しい」、「みんな優しい」「嫌なことがない」と毎回言っていた。自分の意見や思っていることが言える環境だったのだと思う。 ・ボランティアが活動する姿に感動した。 ・はじめは、2泊3日で知らない人たちと研修は嫌だと思っていたが、知り合いになることができ、今後も交流する関係が築けたことはとても良かったと思う。 ・保護者同士の意見交換の際に、講師も自身の子どもの話をしてくれてありがたかった。順調に見えている家庭でもそれぞれに子育てに関する悩みがあり、自分だけではないのだと知り、あきらめずに頑張ろうと思った。 ・子どもは、とにかくキャンプが楽しかったようだ。 ・友達と協力しながら行動する力を養えたことは良い経験になったと思う。 ・子どもは「そにっとキャンプにまた行きたい」「ボランティアたちに会いたい」とよく言っている。

2. 事後アンケートまとめ(参加者)

そにっとキャンプ経過確認票

事前→事後 ※回答者10名中
※○は変化なし

令和4年度 国立曽爾青少年自然の家

お子様について保護者の方にお書き下さい。(裏面もあります)

お子様の学年: お子様の名前:

評価項目		上昇が見られた	「できない/あまりできない」から「できる/たいていできる」に変化した	「できる/たいていできる」から「できない/あまりできない」に変化した	「できない/あまりできない」から変化せず
I 集団参加行動	ルール理解	① ゲームのルールが守れる。 (するをしない、勝敗を受け入れるなど)	3	2	
		② 教室の中などのルール(規則など)が守れる。	1	1	
		③ 友人同士のルール(約束など)が守れる。	2	1	
	役割遂行	① 与えられた役割の仕事ができる。	1		
		② リーダーとして指示ができたり、声を出したりできる。	2	1	2
	状況理解	① 集団の動きについていける。	3	1	
		② 活動場面(休憩時間、課題中など)に応じた行動が取れる。	3		1
II 言語的コミュニケーション	聞き取り	① 個別に話しかけると話に注意が向けられる。	3	1	
		② 個別に話しかけると話の内容が理解できる。	4		
		③ 集団場面での一斉指示に注意が向けられる。	3	1	
		④ 集団場面での一斉指示の内容が理解できる。	6	2	1
	表現	① 伝えたい内容を言葉足らずになることなく話せる。	6	4	2
		② 物事を順序立てて話せる。	2	2	5
		③ 集団に向かって発表や意見が言える。	4	1	3
	質問/回答	① 自分の知りたいことについて質問ができる。	3	2	1
		② 聞かれた内容に合った回答ができる。	4	1	1
	話し合い	① 話し合われているテーマに合った発言ができる。	3	2	1
		② 話し合う中で相手と意見交換ができる。	4	4	2
		③ 全体の意見を理解したうえで結論を出せる。	3	2	2
	会話	① 大人との話のやりとりができる。	4	1	1
		② 友人との話のやりとりができる。	3	1	2
		③ 初めての人とも会話ができる。	3	5	2
III 非言語的コミュニケーション	表情・身振り	① 相手の顔の表情のちがいに気づける。	3	1	2
		② 表情と感情の関係が理解できる。	5	1	2
		③ 身振りやジェスチャーの意味がわかる。	3	2	1
	身体感覚	① 声の大きさの調整ができる。	2	1	2
		② 場の雰囲気(静寂、緊張、のんびりなど)を感じとることができる。	4	1	3

IV 情緒的行動	自己感情	① 感情をコントロールすることができる。	4	1	2	1
		② 自分の感情を伝えることができる。	3	2	2	
	他者感情	① 相手の気持ちを察することができる。	6	2		1
		② 相手の気持ちに合わせた言い方や行動がとれる。	5	3		
	共感	① 他者や所属する集団全体の感情（喜び・悲しみなど）を共有できる。	5	1	3	
V 自己他者認知	自己認知	① 自分の特徴（長所・短所）を知っている。	5	2	1	1
		② 自分に対して自信が持てる。	6	4	2	
		③ 自分の将来の進路への希望が持てる。	4	4	1	1
	他者認知	① 友達の特徴（長所・短所）を理解できる。	4	3		1
		② 相手の立場（家族、先生、友人など）に応じてやりとりができる。	4	2		1
	自己他者認知	① 相手と自分の共通点やちがいがい（性格・特徴）に気づくことができる。	1	1	2	

キャンプ後の変化について

	長所(特異なこと、好きなこと 等)	短所(苦手なこと、嫌いなこと 等)
行動面	・初めて行く場所でも保護者なしで参加できるようになった。 ・何をするにも、まず「やってみよう」とチャレンジするようになった。 ・今まで体験したことがなかったことをやって、自信がついたようだ。 ・以前よりも難しいプラモデルにも挑戦するようになった。 ・学校に遅れずに通えるようになった。 ・規則正しい生活ができるようになった。 ・アウトドア活動へのハードルが下がった。 ・自分の物を自分で準備、管理することを学んだ。 ・キャンプから帰り、一段と頼もしくなった。 ・自分から進んで行動することが増えた。 ・注意が多くても怒らずに「わかってるから。そんなに言わないで」と言えるようになった。	・自己主張ができるようになり、その分言い訳も増えた。 ・苦手なことにチャレンジすることはまだ苦手である。 ・その日にあった出来事を話すことは苦手だが、尋ねられると話せる。

対人関係	・人に優しく接しようと努力している。 ・まだ声は小さいが、頑張って人に話しかけようとしている。 ・友達とコミュニケーションが取れるようになった。 ・知っている子がいないところでも、参加してみると楽しい、友達ができるということを学べた。 ・友達に意地悪なことをすることが減った。 ・いろんな友達と遊ぶようになり、不満を言うことがほとんどなくなった。 ・知らない子たちと家を離れて一緒に過ごしたことで自信になった。 ・班のリーダーを経験したことで、普段から役割を進んで担うようになった。 ・以前よりも「友達と一緒に遊びたい」という気持ちを持つようになった。 ・当初はキャンプに行くことを嫌がり、説得に苦労したが、「行ってみたら楽しかった」という経験をする事ができたようで、良かった。	・興味を持ってない友達の名前が覚えられない。 ・学校では友達と遊ぶが、それ以外では遊ぼうとしない。
------	--	--

3. 前後比較による考察

「そにとつてキャンプ経過確認票」について、事前に行ったものとの比較を行い、

①「上昇が見られた」

②「(できない/あまりできない)から(できる/たいていできる)に変化した」

③「(できる/たいていできる)から(できない/あまりできない)に変化した」

④「(できない/あまりできない)から変化せず」

の4つの観点で集計を行った。

①上昇が見られた項目

全ての項目で上昇が見られたが、その中でも回答者の半数以上で事前アンケートからの上昇が見られた項目は、

【言語的コミュニケーション】

- ・「集団場面での一斉指示の内容が理解できる」(聞き取り)
- ・「伝えたい内容を言葉足らずになることなく話せる」(表現)

【非言語的コミュニケーション】

- ・「表情と感情の関係が理解できる」(表情・身振り)

【情緒的行動】

- ・「相手の気持ちを察することができる」(他者感情)
- ・「相手の気持ちに合わせた言い方や行動がとれる」(他者感情)
- ・「他者や所属する集団全体の感情(喜び・悲しみなど)を共有できる」(共感)

【自己他者認知】

- ・「自分の特徴(長所・短所)を知っている」(自己認知)
- ・「自分に対して自信が持てる」(自己認知)

の8項目であった。ここから、言語によるコミュニケーションを取ろうとする態度と、他者について考えたり慮ったりする社会性、自分自身について客観的に捉え、自信につながる自己肯定感を養うことの一端をそにとキャンプが担うことができたと考えられる。

②(できない/あまりできない)から(できる/たいていできる)に変化した項目

事前調査で「できない」もしくは「あまりできない」と回答していた項目が、事後に「できる」もしくは「たいていできる」に変化したもののうち、比較的回答者が多かった項目は、

【言語的コミュニケーション】

- ・「伝えたい内容を言葉足らずになることなく話せる」(表現)
- ・「話し合う中で相手と意見交換ができる」(話し合い)

【自己他者認知】

- ・「自分に対して自信が持てる」(自己認知)
- ・「自分の将来の進路への希望が持てる」(自己認知)

の4項目であった。班の仲間と意見を出し合いながら課題解決型の活動に取り組むことを通して、言語によるコミュニケーションを経た上で、全体の合意で何かを決定したり、共通の目的を達成したりすることができ、各々の自信にもつながったと考えられる。

③(できる/たいていできる)から(できない/あまりできない)に変化した項目

②と反対に、事前のアンケートでは「できる」もしくは「たいていできる」と回答していた項目が、事後に「できない」もしくは「あまりできない」に変化した項目のうち、特に回答者が多かった(10名中5名)のは、

【言語的コミュニケーション】

- ・「初めての人とも会話ができる」(会話)であった。

ここで、この5名における他の項目での変化を見たところ、一様に【情緒的行動】の「他者感情」の部分での上昇が見られた。ここから、初めて会う人に対してその人となりをよく見ようとする、一方的なコミュニケーションにならないようにする等、相手のことを考えながら関わろうとする姿を推察することができる。

④(できない/あまりできない)から変化が無かった項目

事前調査で、「できない」もしくは「あまりできない」と回答していた項目で、事後も同じく「できない」もしくは「あまりできない」と回答したものうち、特に回答者が多かった(10名中5名)のは、

【言語的コミュニケーション】

・「物事を順序立てて話せる」(表現)

であった。ここから、令和4年度のそにとキャンプでの取り組みは、自分の考えや思いをうまく言語化することまで効果が及んでいないことが伺える。一方で、前述の通り言語的コミュニケーションを積極的に取ろうとする態度が養われていることが読み取れることから、今後は班の仲間と話し合いを通した意思決定をしつつ、それを形にする活動(例 班でお話を創作して発表する、班で絵本を作る 等)を取り入れることも考えていきたい。

4. 考察について

上記の考察は、活動中の子どもたちの様子と、事前事後のアンケートの結果を鑑みて類推したものであり、当然そのすべての結果がそにとキャンプの活動によるものだけではなく、事業の間の学校や家庭での生活による影響も大きい。また、調査の結果を数値で表すことも困難であることから、今後も事業の効果や考察の信ぴょう性を高めるための取り組みを関係機関と連携しながら続けていきたい。

(冒険のキャンプの一場面)



V. 研修支援プログラムの作成

実践研究事業としてのそにとキャンプの目的の一つに、研究成果を基にした、利用団体に活用していただくための研修支援プログラムの作成がある。

全体指示の理解を苦手としている者も多いそにとキャンプでは、活動についての説明や指示をできるだけわかりやすくするための工夫(絵カードや映像の使用、説明をできるだけ簡潔にする 等)がなされている。そうした子どもたちへの支援をうまく取り入れることで、「誰でも参加することができ、それぞれが達成感を得ることができるプログラム(以下 インクルーシブなプログラムという)」を作成できると考えた。また、前述のアンケートの内容から、子どもたちは「山登り」と「火おこし」に関わる活動が特に印象に残っており、達成感を感じていることが伺える。ここから、「火おこし」に関わる研修支援プログラムを作成することとした。

今後は、本プログラムを自然の家を訪れる様々な団体に提供するとともに普及・啓発を図る。以下に、本プログラムの内容について記載する。

(1)プログラムのコンセプト

インクルーシブなプログラムにするため、参加者全員に対して同じ説明で活動に入ることができることに加え、指導する引率者にも理解しやすく、指導しやすい内容とする。また、選択肢を設けることで各々の自己決定を得た上で共通の目標(着火すること、火を安定させること)を達成できるようにすることとした。

(2)コンセプト達成のための工夫

活動に関する説明をできるだけ簡潔な文章にまとめた。また、活動の説明は大きな絵カードと共に紙芝居形式で行えるようになっており、発達に特性のある子どもにも活動の見通しを持たせることができるのと同時に、指導者にとってもすぐ使える資料となっている。

また、説明用の絵カードと同じ絵が描かれた小さい絵カードもあり、引率者が携帯することで必要に応じて見せることができ、個別の支援も可能となっている。

(3)プログラムの資料

(資料1)プログラムの概要説明

利用や活動の打ち合わせを行う際に、引率者に渡すことで事前に活動内容を把握しておくことができる。

(資料2)絵カードと対応する説明文

参加者たちが目にする絵カードと、それぞれの絵に対応する説明文を紙芝居形式にすることで、引率者の経験の有無によらず活動の説明ができる。

〇〇. マイファイヤー

1. ね ら い

薪組みまでの工程すべてをそれぞれで行うことと、自ら選んだ方法で火をつけることで達成感を得ると同時に、誰もがみな同じ目標を達成する。

2. 活動について

- ・年間を通して実施できます。
- ・所要時間 1 時間～2 時間。
- ・本館野外炊飯場もしくは屋根付き野外炊事場で行います。
- ・一人につき一つのカマドを使うため、40 名程度までが適当です。

3. 準 備

※●は当売店で購入可能（2週間前までの注文が必要）

自然の家で貸し出しできる物	利用者と準備する物
キンドリングクラッカー 火バサミ バケツ ファイヤースターター（〇本まで） 説明用ボード 絵カード	活動に適した服装 軍手、古新聞、うちわ、麻紐 マッチ、チャッカマン ●薪（1束 〇〇円）※2～3人につき1束程度 （オプション） ●マシュマロ（1袋 〇〇円） ●クラッカー（1箱 〇〇円） ●割りばし（1膳 10円）※2人で1膳

4. 活動内容

事前指導

- ・道具の使い方、注意点を火おこし説明ボードで確認する。
 - ・薪組みの行程を説明ボードで確認する。
- ※参加者の特性に応じて絵カードを用いて個別に説明をしてください。

薪割り、薪組み

- ・2人1組になってキンドリングクラッカーを使って薪を割る。
- ・説明ボードを参考に、薪組みをする。

火おこし

- ・チャッカマン、マッチ、ファイヤースターターの中から、自分が火おこしに使う道具を選ぶ。
 - ・新聞紙（ファイヤースターターの場合は麻紐）に着火する。
- ※チャッカマンは最終手段とし、マッチもしくはファイヤースターターから始めるとよい。

火おこしができたら

- ・自分でおこした火を眺めながら、ゆったりとした時間を過ごす。
- ・（オプション）マシュマロを串に刺し、自分の火で焼いて食べる。
- ・くべた薪を燃やし切り、残った灰を箒で集めて野外炊飯場または屋根付き炊飯場の残炭入れに廃棄してください。掃除道具は野外炊飯場倉庫横もしくはキャンプ場倉庫横にあります。

5. 留 意 点

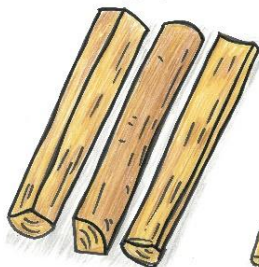
- ・火災ややけど防止のため、火の取り扱いには十分気をつけましょう。
- ・消火及び緊急時の安全のため、消火用のバケツを必ずご準備ください。
- ・服装の素材によっては引火しやすい場合があります。
- ・軍手は綿素材の物をおすすめします。

(資料 2)絵カードと対応する説明文

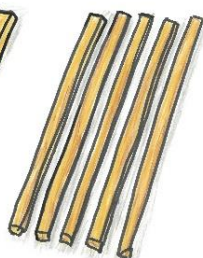
まきわりは ^{ふたり}2人 ^{ひとくみ}1組
で



きゅうりくらいの太さ
6本



わりばしくらいの
太さ 8本

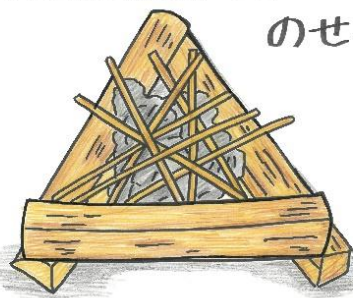


まきを
「さんかく」
に
おく



ま
丸めた
^{しんぶん}新聞紙を
まんなか
におく

わりばしの太さのまきを
のせる



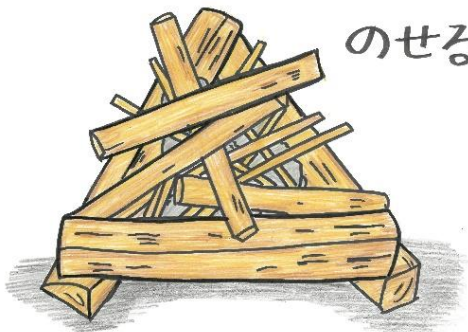
キンドリングクラッカーで薪割りをします。2人1組で、ひとりが薪を押さえて、もうひとりが別の薪で叩いて割ります。

薪割りを何度かして、細い薪を作ります。「割りばし」(太さ1cmくらい)の薪を8本、「きゅうり」(太さ3cmくらい)を6本用意しましょう。作れたら、役割を交代しましょう。

火おこしをするために薪を組みます。まず、割っていない薪を「三角形」に置き、三角形の真ん中に丸めた新聞紙を置きます。

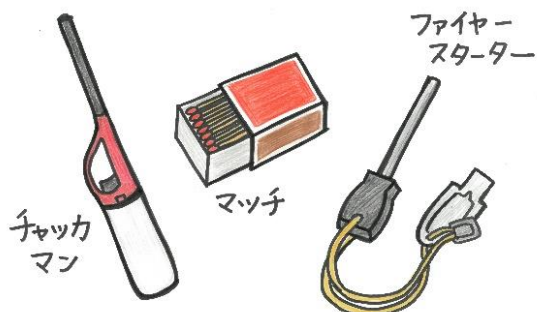
「わりばし」を新聞紙の上に乘せます。空気がよく通るように同じ向きにそろえず、いろんな向きに置きましょう。

きゅうり^{のり}の太さのまきを のせる



「きゅうり」を「わりばし」の上に乘せます。同じ向きにそろえずに、いろいろな向きに置きましょう。

道具^{どうぐ}をえらぼう



薪が組めたら、火をつける道具を選びましょう。チャッカマン、マッチ、ファイヤースターターの中から、自分で選びましょう。

【ファイヤースターター】



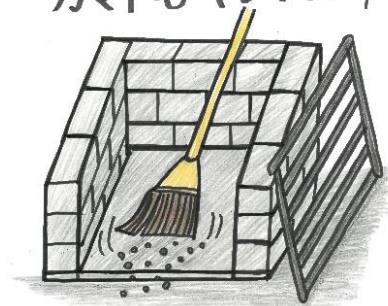
ファイヤースターターは、紐がついている板で棒を根本から先に向かって強くこすって火花を出します。火花をほぐした麻紐に落として火をつけます。

残った炭^{すす}は あつめて



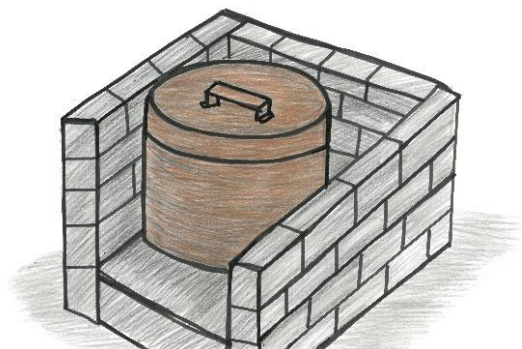
たき火を楽しんだら、薪を全部燃やしましょう。火ばさみでまだ燃えてない薪を真ん中に集めながら燃やします。

のこ はい は だ
残った灰はほうきで掃き出す
カマドもキレイに ✨



薪が全部燃えたら、残った灰をホウキとチリトリで集めます。カマドに灰が残らないように掃きましょう。

はい ざんたん い
あつめた灰は「残炭入れ」に



チリトリに集めた灰は「残炭入れ」に入れましょう。
フタが熱いかもしれないので、注意しましょう。

(絵カード)



(説明ボード)



VI. ボランティアから見たそにとキャンプ

国立青少年教育振興機構では、法人ボランティアの養成も行っている。そにとキャンプにとってボランティアの存在は無くってはならないものであり、中には何年も続けて関わってくれている者もいる。そにとキャンプのボランティアには参加者たちの特性を把握し、個々に応じた対応を取ることができる力が求められるが、ボランティアたちは参加者との関わりの中でお互いに助け合い、高め合うことでその資質を身に着けていく。

そにとキャンプの準備を進めるにあたり、主担当とAD(アシスタントディレクター)は実踏で顔を合わせた時だけでなく、電話やメールを利用して連絡を取り合い、活動内容やその進行、資料などについて打ち合わせを重ねる。これを通して、ADは事業のねらいやそれに対応するプログラムの進行を職員と同等に把握し、キャンプでの役割や動きを他のボランティアに指示するとともに、当日の進行や参加者たちへの指示、説明をする重要な役割を担う。

本稿では、大学生でありながらも、貴重な時間を費やして令和4年度のそにとキャンプのADの仕事を全うしてくれた松下陸人さん(キャンプネーム:まつび)に「ボランティアから見たそにとキャンプ」と題して、事業に関わって感じたことを答えてもらった。

1. 「そにとキャンプ」にボランティアとして関わるうえで、他の事業との違いを感じることはありますか？また、それはどのような違いですか？

そにとキャンプにおけるいちばんの特徴は、参加者それぞれの特性が事前に明確になっている所です。他のキャンプよりも参加者それぞれの個性が強く、ボランティアは班全体としての流れより、参加者ひとりひとりに注目する必要があると感じました。

2. 令和4年度の3回のキャンプに、ADとして関わってみてどうでしたか？

そにとキャンプのADをさせて頂いて、学生の内にはなかなか出来ない経験を沢山させて頂きました。ADでは参加者たちに対してはもちろん、そにとキャンプに来てくれたボランティアにも目を向けなければなりません。また、キャンプ全体の流れの把握や前に出て話す為の資料作成など、私が今まで参加してきた事業の中で視野を最も広く持つ必要がありました。全てを完璧にこなせた訳では無いですが、単に大変な役割を全うしただけではなく、全体の指示出しや指揮を挙げたりする立ち位置に立たせて頂いたことで、自分が主導者側の気持ちを理解する事が出来たことがいちばんのやり甲斐でした。

3. 「そにとキャンプ」に関わるにあたって、自分自身が特に大切にしたいことはありますか？

私がそにとキャンプで特に大切にしたい事は、堂々とする事です。長時間キャンプをしていると上手く行かない事はいくつも起こります。ですがそれらにADが狼狽えていては、子供達やボランティアに不安を与えてしまい、安心してキャンプを行うことができません。そのため、不測の事態が生じて焦らず迅速に対応する事を心がけました。

4.「そにっとキャンプ」の参加者たちは、3回のキャンプを通してどのように成長したと感じますか？

出会いのキャンプでは、参加者たちは自分本位で物事を考えたり進めたりしていましたが、冒険のキャンプではまずボランティアの存在をより意識してくれていた様子でした。そして、旅立ちのキャンプでは仲間意識が芽生え、参加者どうしでのコミュニケーションが活発になり団体意識が強くなっていたと感じました。

これは通年のキャンプでしか分からない変化であり、参加者たちが他人を意識しながら活動するようになることが大きな成長だと考えます。

5.「そにっとキャンプ」に関わって思うことを教えてください

そにっとキャンプに関わって、楽しい事はもちろんですが、辛いことも沢山ありました。しかしその全てが自分にとってプラスに働いていると感じます。自分自身の成長に大きく関わってくれたそにっとキャンプには感謝の気持ちでいっぱいです。

(そにっとキャンプのボランティアたち)



VII. そにとキャンプに協力していただいた方々より

「そにとキャンプの意義に関する一考察」

奈良教育大学特別支援教育研究センター

専任講師 富井奈菜実

先日、そにとキャンプに参加された保護者のアンケート結果(子どもの変化について)を見せていただきました。ここから、頼もしくなった、自ら進んで行動したり挑戦したりするようになったなど、子どもたちがキャンプを通して自信を得ていることが読み取れました。また、対人関係については交友関係が広がったり、友達と遊ぶことが好きになったり、友達に優しくなったりと、人と関わることの楽しさが深まっているようでした。そのほかにも、規則正しい生活になった、学校に遅刻しなくなったなど、生活面にも変化がみられていたようです。

そにとキャンプの何が、上記したような子どもたちの変化をもたらしたのでしょうか。その答えはきっと一つではなく、子どもたち一人ひとりによっても異なると思います。ですが、そにとキャンプが用意している、自然のなかで過ごす時間こそが最大の魅力であり、欠かせない要素だと考えています。自然の中で過ごす時間、というのは当たり前すぎる答えかもしれませんが、私が重要だと思っているのは、普段の生活ではほぼ触れることのない「自然」を体感できる点です。単に緑豊かな場所で、ということだけでなく、身体全体で「自然」を感じ、それに向きあう時間であるということです。一番わかりやすい例は飯盒炊爨(はんごうすいさん)です。普段の私たちの生活は、多くの機械に頼ることで成り立っています。スイッチを押せばあとは何も気にしなくてもご飯が炊けますし、つまみを回せば火がつき、調理ができます(もはや今はスイッチを押せば電気で調理ができる時代です)。そうした日常生活の「当たり前」が成り立たないのが、「自然」であり、そにとキャンプではないでしょうか。

今回の調理ではファイアースターターを使っての火おこしが計画されていました。コアな人からすれば文明の利器を使っているぞ、と言いたくなるのかもしれませんが、それでもスイッチ一つで火を使うことに比べれば非常に苦労を要するものです。実際に子どもたちは日々の練習を重ね、本番の火おこしに臨みました。本番は私も見学させてもらったのですが、一番の見どころに立ち会えたなと思いました。なぜなら、全く火がつかないからです。何度も何度もスターターを擦り合わせますが、手が痛くなるだけで火花は出ません。「あ！火花出た！」と喜んで、一瞬で消えてしまい、火種にもなりません。内心、放り出してしまわないかとドキドキしながら見ていました。しかし子どもたちは決して諦めることなく、ひたすらに手を動かしていました。そしてなんとか火を起こしたあとも、火が消えないように薪を割って焚べたり、飯盒を注意深く管理したりと、見張りが必要になります。そうしたことも、経験豊かな大人に助けもらいながら最後までやり遂げ、美味しいカレーを食べることができました。

このように、普段の生活の「当たり前」なことを自分の力で一から成し遂げていくこと、それがそにとキャンプの魅力であり、この活動の一つの意義と言えるのではないのでしょうか。メインイベントである山登りも、自転車や車、電車など楽な移動のための「当たり前」なものを置いて

成し遂げられるものです。子どもたちはそうした「自然」を体感することを通し、自信を得たり、苦労を共にした仲間を好きになったり、自分の生活を作っていくようになっていったのではないかと思います。また発達障害のある子どもたちは、最後まで自分の力で成し遂げることに苦労することが少なくありません。そのような困難さに対し、キャンプの先輩としてのボランティアと一緒に活動してくれること、励ましたり助けたりしてくれることもまた重要な要素だったと言えます。

これとは別にもう一点、考えておきたいことがあります。それは、そにとキャンプや障害のある子どもを対象とした各種プログラム、様々な教育的実践などが子どもたちにとって、どのような経験として蓄積されたのかという視点をもっておくということです。こうしたプログラムの評価に際して、子どもたちにどのような変化が起きたのか、その変化をもたらした要因は何であるのか等を丁寧に検討することは当然重要なことと言えます。実際にそうした評価から、子どもたちの変化やプログラムの意義が様々に確かめられています。ただし、こうした評価はどちらかという子どもを外側に焦点が当たっています。また変化を評価の対象にした場合、その時々の子どもの内面に焦点が当たりにくいという限界もあります。これに対し、私は子どもたちの内面にもっと目を向けていく必要があると思っています。つまり、どんな力がついたか・つかなかったという能力等の有無やその変化などのみを評価対象としてみることの限界性を知っておくことと、その範囲外にある子どもたちのめっちゃ楽しかった！とか、めっちゃ大変だった！という、大きく揺れ動いた思いや感情、それ自体の意義や価値を見落とさないということです。ついつい私たちは何かしらの効果を見出したいくなりますが、そうした評価軸では測ることのできない、ただただ楽しかった経験は人生に豊かさを与えてくれる重要なものです。さらに言えば、大人になって「あああれ楽しかったなあ」と振り返ることのできるようなものとして、経験が蓄積されることもまた重要です。それは決して「一生の思い出に残るようなプログラムを！」という意味でなく、自分自身を振り返ってみたときに、なんとなく、あの経験が自分を作ってきたな、とか、いろんな人に出会って今の自分があるんだなというように思えることが、自己を形成していく上で重要な要素となるということです。このように自己の変化や成長を実感することを自己形成視と言いますが、これはそにとキャンプの一つのねらいでもある自己肯定感を育てる上でも重要な概念だと思われます。そういう意味では、活動後に「どうだった？」とか「楽しかったね」と子どもたちと一緒に振り返ったり、彼らの思いや感情に共感したりする機会を作ることも大切な関わりとなります。そして以上を踏まえれば、子どもたちが楽しい、面白い、苦しい、辛いなど、様々な感情に揺れながら、最後には「あ～楽しかった」「また行きたいな」と、手応えがもって締めくくれるように、ということをプログラムや実践の立案の中心に据えておくことが重要になるのではないのでしょうか。様々な力や行動の変化は、その結果として導かれるものだと思います。そのことはそにとキャンプの実践が物語ってくれています。

以上、色々と述べてきましたが、上記したことはむしろそにとキャンプに関わらせていただき、またこの文章を書く機会をいただいたことで得られた知見です。発達障害のある子どもだけでなく、子ども時代に経験させたい活動とはなにか、自然体験の持つ意義とは何かということを教えていただけたことに、感謝いたします。

「そにとキャンプに関わって」

大和高田市教育委員会
特別支援教育指導員 吉田 昌功

私が、そにとキャンプの取り組みを最初に知ったのは、2005年頃に特別支援教育に関する講演会に参加した時でした。冒険的な自然体験活動を通して、対人関係やコミュニケーションに課題を持つ子どもたちの自尊感情を高めることや、青少年教育施設のナショナルセンターとして、調査研究と普及を目指していることなど紹介されていました。その後、2014年からボランティアとリーダー、保護者への研修に関わらせていただくことになりました。担当の方からは、曽爾の自然を十分に味わえる体験を通して、社会性やコミュニケーション力が育まれるような取り組みにしたいとの思いをお聞きしました。子どもたちと関わる活動場面でヒントとなる行動療法(ペアレントトレーニング)の手法を研修の柱としました。励ましほめることなど自尊感情を高める接し方や声のかけ方を中心に、回を重ね研修の内容を修正してきました。

ボランティアとリーダーへの事前研修では、行動の分析や関わりのポイントを学ぶとともに、前年までの経験や状況を振り返り意見交換をして、子どもとの接し方についてのロールプレイを取り入れました。また、発達障害に関して医療や心理面の専門的な情報は多数あるものの、親どうしが気持ちや悩みを共有する機会は限られることから、保護者プログラムでは自然の家の職員も加わって、対話によるセッションへと発展してきました。対話では「何を言ってもいい」「人の言うことに対して否定的態度をとらない」「発言せず、聞いているだけでもいい」「話がまとまらなくても、分からなくなってもいい」など哲学対話のルールを参考にしました。参加者それぞれが抱える心配や不安を出し合い共有することで、視点が広がり気持ちが和らぐ時間となったと思います。

曽爾の大自然のなかで、発達障害という見かたに偏ることなく広い視野から、人にとって自然体験活動や対話が大切であることを、子どもたちと保護者に感じていただけたと思っています。

「そにとキャンプの継続的发展を願って」

そにとキャンプ親の会アドバイザー
地球元気村 校長
奥田 博

そにとキャンプは自然の家の看板事業の一つでもある。

過去に、専門家を交えて、この事業の成果について効果測定も含め検証したことがある。以下は、その時の報告書に課題として提起された内容の一部である。「そにとキャンプは社会的スキル向上に効果があり、キャンプや野外活動自体が、発達支援や教育に対して豊富な機会と資源を提供する可能性がある。ただし、それによって認められた効果は、日常生活に対して

一般化される可能性が見出されるが、一時的あるいは一過的な効果に留まってしまうおそれがある。なぜなら、参加児童たちが再び日常生活に戻ると、そにっとキャンプとは違う日常の状況に置かれることになる。そして、その状況はそにっとキャンプの効果、すなわち、そこで形成された行動様式や得られた達成感を打ち消すように作用するのである。それゆえ、重要なことは、日常的な生活や教育において**キャンプの効果を持続させるために何をしなければならぬか**ということである。日常的な教育を担う教員や保護者たちとの共同や連携について研究する必要がある。」

この課題に対応して、日常的な生活や教育においてキャンプの効果を持続させるために生まれたのが、そにっとキャンプ親の会である。

この組織は自然の家の支援を受け、そにっとキャンプ参加者の保護者が主催する第二のそにっとキャンプである。

自然の家の活動をモデルに、子ども達には自然体験活動から困難を乗り越った時の達成感や満足感から自己肯定を促すとともに、保護者にとっては日頃の思いを共有し、子どもとの接し方等を学べる場でもある。

そにっとキャンプの特徴の一つに、年3回のキャンプの中で、夏のキャンプには、子どもとともに保護者も2泊3日のキャンプ体験がある。

私はこの2泊3日のキャンプに保護者担当として関わらせてもらっている。

保護者の思いを受け止め、過去のキャンプの成果を述べるとともに、これまでに立ち上がった親の会の活動について紹介している。

そにっとキャンプが子ども達に及ぼす効果は、キャンプが終わった後の子ども達の「そにっとキャンプに来年も参加したい」「次のキャンプはいつあるの」等の言葉からも保護者に伝わっている。

毎月1回でもこのキャンプが開催されれば、キャンプで得られる社会性等の力はより向上するはずである。しかしながら、自然の家のこのキャンプにリピーターとして毎年参加したくても、このキャンプの趣旨や応募人数から考えてもその可能性は少ない。

これまでに立ち上がったそにっとキャンプ親の会は、10グループを越えようとしている。その活動もコロナウィルスの感染拡大による防止策が実施されるまでは、親の会が集結してシンポジウムや合同の情報交換会まで開催できるようになった。また、子ども間の信頼関係も生まれ、お互いに支えあうという営みが見られるように成長してきた。

「親の会をつくろう」を合言葉に立ち上がった初期の親の会の子供達はずでに社会人である。小学校高学年から私と関わった子供達から届く便りを目にするたびに、自然の家のそにっとキャンプが出会いの場を提供し、自然の家の支援を受けて親の会が生まれ、親の会が子供達の良き未来を生み出すことを実感するとともに、このキャンプの継続的発展を願っている。

謝辞

国立曽爾青少年自然の家では、平成10年度に不登校の子供たちを対象としたキャンプからスタートし、課題を抱えた子供たちを支援する事業を実施して四半世紀が経過しました。この間、研究者をはじめ多くの方々のご協力を得ながら創意工夫を重ねて、現在「そにとキャンプ」として発達に特性のある子供たちの社会性と自己肯定感を育む取組を推進しています。

着任して初めて関わった「そにとキャンプ」の開会式は、前を向いている子どもは殆どおらず千々に乱れ呆気にとられるばかりでした。それが豊かな自然環境の中で計3回のキャンプを通じて、様々な冒険的・課題解決的なプログラムを互いに協力し合いながらクリアし、成功体験や達成感を積み重ねて迎えた最後の閉会式では、子供たち全員が静かに整列してしっかり前を向いて話を聞く態度を目の当たりにし、「そにとキャンプ」の意義を認識するとともに、その役割を持続的に果たしていく重要性を痛感しました。

文部科学省の令和4年の調査によれば、通常学級に在籍する小中学生の8.8%に、学習面や行動面で著しい困難を示す発達障害の可能性があることが明らかになっています。平成24年が6.5%であり増加する傾向にあります。発達障害を早期に発見し、障害の状態等に即した適切な指導を行うことが求められています。

国立青少年教育振興機構では、現在「実践研究事業」として、大学の研究者等と協働して専門性の高いモデル的事業を行い、その成果を活動プログラムとして学校をはじめとした関係機関に普及させる事業を実施しています。

当自然の家では、「そにとキャンプ」を「実践研究事業」に位置付けて、キャンプの運営体制やプログラム体験を通じた子供たちの変化、保護者アンケートからの分析結果などを取りまとめ、この度、報告書を作成しました。また、新たに企画したインクルーシブな活動プログラムに関する資料も掲載しています。学校をはじめ青少年教育施設の方々にご高覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。活動プログラムについては、実際に活用していただくことを願っています。

結びに、当事業に当たりご支援、ご協力をいただいた企画評価部会の各委員をはじめ多くの関係者の皆様、またキャンプにおいて子供たちに寄り添って支援していただいたボランティアの皆さんに厚く御礼申し上げます。

令和5年3月 国立青少年教育振興機構
国立曽爾青少年自然の家
所長 坪内 孝治

国立曽爾青少年自然の家 そにとキャンプ(報告書)

お世話になった方々

富井 奈菜実 氏(奈良教育大学特別支援教育研究センター 専任講師)

吉田 昌功 氏(大和高田市教育委員会 特別支援教育指導員)

奥田 博 氏(そにとキャンプ 親の会アドバイザー)

後援

奈良県教育委員会 橿原市教育委員会 宇陀市教育委員会 名張市教育委員会

令和4年度「そにとキャンプ」担当職員

国立曽爾青少年自然の家

山内 康平(企画指導専門職)

三木 智弘(企画指導専門職)

菱川 裕輝(事業推進係員)

百田 恵美(事業推進係員)

令和4年度「そにとキャンプ」ボランティアスタッフ

松下 陸人(AD) 小猿 桜花(CL) 松山 大悟(CL) 浅居 直範(CL)

藤谷 真代(CL) 黒田 愛美(CL) 河野 大地(CL) 進藤熙斗(MA/CL/CS)

金丸 愛菜(CS) 今井 紗良々(CS) 川畑 圭輔(MA) 三原隆之(MA)

畠山 朝浩(MA) 金澤 良子(MA)



国立曽爾青少年自然の家 教育事業「そにとキャンプ」報告書

発行日 令和5年3月

発行 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立曽爾青少年自然の家

編集 山内康平(企画指導専門職)

お問い合わせ/独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立曽爾青少年自然の家

〒633-1212 奈良県宇陀郡曽爾村太良路 1170

TEL 0745-96-2121 FAX 0745-96-2126 MAIL soni@niye.go.jp

URL <https://soni.niye.go.jp>

